追悼

金内英司先生を偲んで

「金内先生を偲ぶ」

佐藤　篤生
（昭和52年林学科卒）

9月24日、金内先生の訃報の知らせがありました。翌日私は鶴岡へ向かいました。ご自宅で安らかに眠っている先生にお会いしました。

在学は43年前のことです。当時、森林工学研究室では庄内海岸の黒松防砂林の調査に明け暮れていたと思います。研究室では調査の後は、反省会と称して飲み会をすることもあり、先生には大変ご迷惑をかけたと思います。また、昭和51年10月の小国町の林道調査ではテントを張っての行程でした。そして、大学に戻ると酒田の街が夜通し赤々と燃える様子を屋上から見たのを思い出します。ある時は、ご自宅の庭木の雪囲いを研究室のみんなでやって見たものの結果は素人三昧の出来で、それでも喜んで頂いた事、等々思い出は尽きません。

また、先生とは私が就職を断念して農家を継ぐことになった折にも気にかけてもらいました。その時以来年に一度は電話で近況を伝えあうようにしていました。平成5年の大冷害、東日本大震災、去年の台風19号でも励ましてくれました。一方、先生は退官後も庄内空港の開設に関わっていた事を話されていました。

6年前には、米寿のお祝いを研究室の仲間と湯野浜の宿で催すことが出来ました。私達もすでに還暦を超えていましたが、先生の変わらない元気な容姿には驚かされました。あの夜は学生時代に戻ったような楽しい時間を過ごす事が出来ました。

帰路、庄内平野の黄金色の田んぼでは稲刈りが盛んに行われていました。私は「蝉しぐれ」の主人公文四郎が、幼なじみのお福を尼寺に見送る最後の場面が頭に浮かびました。

先生とは永遠の別れとなりましたが、今日まで穏やかな物言いと優しさで接して頂いたことを感謝申し上げます。青春時代を鶴岡で過ごし、恩師の金内先生に出会えたことは人生の宝物です。改めてご冥福をお祈りいたします。そして、残された奥様のご健康をお祈りします。

「金内英司先生を偲んで」

樋口　裕之
（昭和63年林学科卒）

金内先生の訃報に接し、羅針盤を失ったような気がしております。

農学部に移行してからの2年半は、自宅通学であったせいもあり、日々の学生生活に関しては余り記憶が無いのですが、金内先生の森林工学研究室に所属するきっかけとなったのは、ある日、同級生から電話があり、「研究室はどこにするのか、みんなもうほとんど決まって希望は叶わない状況である」といったような内容を伝えられ、慌てて登校すると、金内先生が森林工学研究室で引き受けて下さるというような成り行きだったように思います。その研究室での金内先生との出会いが、その後の私の人生の転機となりました。研究室在籍後、卒論作成にあたっては、国有林内の防風柵を借りての風速調査を卒論にしたらどうかとの御提案をいただき、関係機関と調整の上、最後まで面倒を見て下さり、無事に卒業できたのも金内先生の存在があったからこそであります。

在学中、将来についても深く考えもせず、教員採用試験や公務員試験などを受験はしたものの叶わず、色々あって鶴岡市内の民間会社に就職しましたが、これといった仕事もほとんどなく、ヒマをもてあます毎日でした。

そのうち、農学部も近いことから、会社の昼休みに研究室に愚痴を漏らしに行くようになりました。仕事がつまらないというような事を日々金内先生に伝えていたような気がします。そんなある日、先生から、県の出先機関で林務の臨時職員を探しているようだから受けてみないかと言われました。当時、県の林務職とはどういうものなのか想像もつきませんでしたが、今の生活を変えようと思い、先生の紹介をもとに一年たらずで会社を辞め、一年のみの臨時の県職員となりました。その在職中に山形県の林務職の採用試験を受験し、今に至っております。

その後、「先生への恩は生涯忘れるな」との、今は亡き母の言葉により、三十数年来、盆暮れに先生の御自宅へお邪魔し、変わらぬお姿に触れ、この夏も元気なお姿を拝見したばかりでした。この間、先生のみならず、先生の奥様からも折にふれ様々な御助言を賜り、感謝に堪えません。

今でも、あの日あの時、金内先生の指南がなかったら今の私はどうしていただろうと思うことがあります。羅針盤を失った今も、かつて指示された航路に従い、迷いなく残る人生を進みたいと思います。書ききれない様々な思い出がよみがえって参りますが、これにより追悼の言葉とさせていただきます。

金内英司先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌

冨樫二郎先生を偲んで

「冨樫二郎先生を偲ぶ」

元農学部教員
髙橋　敏能
（昭和45年農学科卒）

冨樫先生との初めての出会いは、昭和四十五年に私は技官として採用され、冨樫先生は助教授として東北大学から山形大学に栄転されたときだったと記憶しています。卒業した高等学校と大学が同じであり、干支が「亥」年の一回り違う先輩として親しみを感じました。冨樫先生が山形大学農学部に在職期間二十九年、定年退職後十九年の約五十年間、半世紀に亘るお付き合いをさせていただきました。昨年末、お電話でお聞きした声を最後に今年一月十四日逝去されました。

この間、先生には公私ともにお世話になり、語り尽くせない程の思い出があります。冨樫先生の人柄を表す言葉として、葬儀のとき奥様からいただいた御礼状のことばが印象に残っていますので、その中の一文を紹介します。――飾り気がなく正直。気の利いた言などは出てこない人でしたが、どこまでも誠実で実直なところが夫のよさだったと振り返っております――。この中の「誠実で実直な性格」は、冨樫先生と接した経験がある方は誰も感じていたと思いますが、一面では大変ウエットな性格であり、情が厚く、義理人情を大事にする先生でもあったと思います。先輩を敬い、後輩の面倒見が良かったので、年代を問わず多くの方々から好かれた性格の持ち主でした。また、冨樫先生は大変謙虚な性格であり、よく座右の銘として仰っていた言葉は「実るほど頭を垂れる稲穂（かな）」でした。その一例に「日本植物病理学会賞」を受賞され、全国新聞に掲載されましたが、一言も自慢の言葉などありませんでしたし、素振りさえ感じませんでした。

同窓会でも常に先頭立って動き、時には厳しく、時には優しく我々後輩を指導してくれました。「鶴窓会」や「農学科の会」でも、先を見通せる能力を持っており、常に斬新で先駆的な考えを持って当たっていたと振り返っています。特に、山形大学農学部創立五十周年記念事業の時は、記念式典と祝賀会の開催、記念碑の建立の尽力は勿論のこと、記念誌の編集委員長として刊行された立派な冊子は農学部の財産として後世に残っていくことになるでしょう。

冨樫先生には半世紀近くの間、私が困ったときや悩んだときなど、数え切れないほどの回数真摯に相談に乗っていただき、常に適切な助言を与えてくれました。また、挫折して立ち上がれなくなったとき何度も助けていただきました。しかし、今となっては相談出来ません。残された人生を冨樫先生から学んだことを心の糧として生きていきたいと思っています。

どうぞ、安らかにお眠りください。

合掌

「冨樫先生との思い出」

山形大学名誉教授
貫名　学

冨樫先生が天命を全うされたとのお電話を宮城農業短大の木村俊夫先生から頂き、葬儀に参列できたのは幸せであった。いつも冨樫先生のご自宅で奥様の手料理をごちそうになりながら、いろいろ談義をするのはとても楽しかった。その時々の話題は幅広く忌憚のないご意見が印象に残っている。なんとも言えない愛嬌がある一方、学術への厳しいご意見を持っておられた。また先生は人を惹きつける魅力があった。共通の話題には〝きのこ〟があり、仙台で開催されるきのこの展覧会には先生から日程を教えていただき何度も参加した。また羽黒山頂付近のきのこを探索した。

さらに、日本菌学会東北支部会で毎年開催される支部会も思い出深い。先生は支部長として活躍された。毎年1泊2日で東北6県のいずれかで開催されるのが常で、各県で採集された実物のきのこを見たり、また採集の前日の勉強会で会員有志が持ち寄ったスライドを見るのが楽しかった。山形での開催では、先生や生井先生（故人）が担当支部長・幹事長として活躍された。きのこには不思議な魅力と食べる楽しみがあり、私はその成分に興味があり、先生は特に毒きのこに興味を持っておられた。この会は2日目が採集会となっていて、会員が四方八方におもむろに山に分け入り、採集して、持ち帰り、テーブルに並べて鑑定会が始まる。私は先生の後からあれやこれやと話をしながらきのこ狩りについていくのが楽しかった。並べられたきのこは、きのこ鑑定の達人達が鑑定し、その解説がなされるのが常であった。私は採集されたきのこを持ち帰って成分研究に供した。

また出版に至ったものとして、先生と生井先生と私で「東北のキノコ」（日本菌学会東北支部編、2001年、無名舎）出版事務局として活動したのが思い出される。この本は東北支部会の会員の方々が各自撮影した自生きのこの写真を持ち寄り、その解説をそれぞれの会員が加えているのが主な内容である。出版までに数年を要した。先生は、その本の中で、「東北地方の地勢、気候、植生とキノコの特性」のタイトルで、佐々木仁八郎氏と共著で執筆しておられる。

また日中菌学会に二人で参加したのは楽しい思い出である。先生はエグゼクティブクラスの航空券を持っておられたので、私も同じクラスに乗せて頂いたことはラッキーであった。中国の学会では先生は積極的にその他の国の参加者の方々と打ち解けていて、好奇心あふれるお姿が思い出される。

「冨樫二郎先生を偲ぶ」

菅原　克哉
（昭和60年農学科卒）

冨樫先生がご逝去されたのは、2020年1月14日のことでした。翌日夕方に、植物病理学研究室（以下、病理）同級生の荒井（旧姓大滝）さんから連絡があり知りました。前年の9月に、荒井さんと東根市の病理同級生石垣さん、私の3名で先生宅を訪